

雑誌『人間』と「戦後日本」との接点

——八〇年代台湾における「核」言説のジレンマ

李文茹

はじめに

二〇一六年夏、台湾で中沢啓治『はだしのゲン』の中国語訳が刊行された（『赤脚阿元』台湾…遠足文化）^①。原爆マンガでいえば『夕風の街・桜の国』（『夕嵐之街 櫻之国』、台湾…尖端、二〇〇六年）に次ぐ翻訳であるが、『夕風の街・桜の国』よりも多様な戦争被害者や被爆者を描いた『はだしのゲン』中国語訳は、台湾の読者に新たな観点から「原爆」問題を考える契機をもたらすだろう。

台湾社会では、五〇年代以降の日本社会で現れた「反戦・平和反核」といった言論を形成・受容する環境もなければ、被爆者やキノコ雲の下で起きた出来事への想像力を育む土壌すら貧弱だった。その背景には、国共内戦で中国共産党に敗れて台湾に渡ってきた国民党が三八年間にわたって戒厳令を敷き、「抗日戦争」を台湾社会の集団的記憶として浸透させたことも当然あるだろう。「ヒロシマといえば、パールハーバー」、「ヒロシマといえば、南京大虐殺」

という栗原貞子の詩のように、台湾では原爆を象徴するキノコ雲は、大日本帝国の敗北や戦争の終結を意味する記号であり、植民地支配から解放された記号でもあった。当然ながら台湾人被爆者の存在も歴史の影に隠されてきた^②。

むしろ、「核」の問題にアクセスする社会的回路は、原子力発電所（以下、原発と略す）の問題が注目を浴びることによって形成されてきたといつてよい。台湾ではインフラの整備や経済発展のため、一九七三年に「十大建設」が打ち出され、原発関連施設の建設もそのうちの一項目であり^③、第一原発の稼働は一九七八年のことである。原発発をめぐる言説は七〇年代半ば頃から登場し、八〇年代半ば頃から次第に社会運動へと発展した。最初に原発に抗議するデモは一九八七年三月二七日に第三原発の前で行われ、翌年の四月二四日に台湾電力会社を包囲した出来事はその時代の運動のピークを象徴するものでもあった（『人間』三二二号、一九八八年六月）。このように台湾の原発運動の歴史的な歩みを考える時、七〇年代後半から八〇年代にかけては重要な時期でもあり、また戒厳令

解除前後という台湾民主化運動の歴史においても重要な時期でもあった。

「原爆」の被害に対する想像が貧弱のまま歴史を歩んできた台湾において、原発の問題を通して「核」の問題が語られてきたのだが、その社会的な回路はいかなる形で構築されてきたか。本稿の目的は、一九八五年に創刊された雑誌『人間』（一九八五年一月～一九八九年九月）を題材に、その問題の一端を考察することにある。

『人間』は、作家・陳映真（一九三七年～二〇一六年）によって創刊された、報道写真（フォトドキュメンタリー）・記録文学（ルポルタージュ）。台湾では「報導文学」というを特色とする月刊誌である。言論統制が行われた戒厳令下の時代に、主要なメディアではあまり報道されない、マイノリティ問題をはじめとする国内外の社会問題にスポットライトを当て、台湾社会の暗部を告発したのだが、この雑誌には日本の公害問題や原発問題について多く報道したカメラマン・樋口健二も深く関わっていた。

本稿は雑誌『人間』において、「核」や原発の問題が報道写真や記録文学の中でいかにイメージ化されてきたか、さらには「核」関連の記事からいかなる歴史的問題が読み取れるか確認することで、八〇年代台湾社会における「核」のイメージ形成の一端について考察したい。それはアジアで初めて脱原発法を可決した台湾の反原発の歴史的歩みを再考することにもつながるだろう。

1 「核」言説のプロローグ：雑誌『台湾と世界』とテクノロジー・エロロジー

雑誌『人間』を見る前に、七〇年代後半から八〇年代前半における「核」関連言説の特徴について、幾つかの雑誌メディアを取り上げて概観しておきたい。

『人間』三二号「反核の意味を追い求める」（原題：尋找反核運動的意義）によれば、月刊『リーダーズ・ダイジェスト』（中国語版）で発表された「恐ろしい核廃棄物の問題」（原題：可怕的核子廢料問題。一九七四年四月号）は台湾での最初の反原発に関する記事とされる。文芸ジャンルで早い段階から原発問題に注目したのは月刊誌『夏潮』（一九七六年二月～一九七九年二月）で、第一原発の商業運転が開始する二年前に発表された「核エネルギー発展の問題を見抜く」（一九七六年七月）は、米国が直面しているエネルギー問題や日本、米国で行われた反原発活動に触れた上、核エネルギーの利害について紹介している⁽⁴⁾。

言論統制の時代では、核を題材化した雑誌の大部分は『夏潮』といった左翼雑誌で、与党だった国民党と政治的立場が異なっていたため「党外雑誌」とも称される。八〇年代以降から『人間』が創刊されるまでの左翼雑誌における「核」言説を考えると、在外台湾人たちの活動も看過できなからう。北米で刊行され『夏潮』とも密接な関係があった中国語月刊誌『台湾と世界』（原題：『台灣與世界』、英語タイトル“*Taiwan and the World*”。一九八三年六月～一九八七年六月。全四二号）は、中国や香港をはじめとした世界の情勢にも多くの関心を払いながら、台湾をめぐる政治、社会、文化の

記事や文学作品を多く掲載する。葉芸芸によってニューヨークで創刊されたこの雑誌は、八〇年代半ば頃、アメリカのABCテレビ局が制作した番組『ザ・デー・アフター』や、バーイングIIに対する大規模な平和反核運動「Euro Missions」を取材した番組を紹介しながら核兵器の開発や戦争問題にも言及した記事『ザ・デー・アフター』のスクリーンの前と裏（寧ろ、一九八四年三月）を皮切りにその後も「核」の関連記事を多く掲載している。

北米の留学生が中心であるが、この雑誌の購読者や寄稿者は米国在住者に限定されてはいない。例えば日本に在住し『台湾霧社蜂起事件 研究と資料』の著者でもある戴国輝や、台湾に在住し今日では反原発運動家として知られる生物学者でもある林俊義、台湾先住民作家のシャマン・ラポガン（中国語名の施努来の名前で発表）による記事も見られる。台湾の雑誌からの転載記事も散見されるが、言論統制下の台湾におけるメジャーな報道では扱われない題材や台湾植民地時期に関する歴史や文芸作品、中国、アメリカと言った海外の政治社会情勢、最新の科学技術に関する海外報道の中国語訳による紹介などが豊富であり、「核」に限らず戒厳令下で生活していた台湾在住の購読者にとってみれば、多方面にわたる重要な情報源であったことは想像に難くない。

台湾の原発は、先に触れたように、七八年の第一原発の商業運転の開始によって歴史の幕を開けた。八一年に第二原発、八四年に第三原発が相次いで商業運転を開始し、その間の八二年には離島の蘭嶼で建設された低レベル放射線廃棄物の長期貯蔵所に、最初の核廃棄物を詰めたドラム缶が運搬された。八二年に原発施設作業員が被曝され犠牲となった事故が起き、八五年には第三原発

で火災事故が発生している。

『台湾と世界』は『ザ・デー・アフター』のスクリーンの前と裏に次いで「死の島」（林猛、一九八五年三月。週刊『向前看』一九八四年一月からの転載）を掲載している。放射線廃棄物が貯蔵される蘭嶼で三年間勤務していた、あるパイワン族の医者之死を放射線との関連で描いたこの記事の最後では、人間社会で被害が出ないように核廃棄物を太平洋の海溝に定期的に投棄する呼びかけが綴られており、海洋投棄の危険性などには無自覚な様子も窺える。そのほかは、例えば八五年には「台湾の生態にとつての最大の敵」（四月号）、特集「第三原発の火事事故のあと」（九月号）、「台湾原子力発電所の内幕を摘発」（十一月号）などがあり、チエルノブイリ原発事故が発生した八六年には「チエルノブイリの原発事故から台湾の原発政策を考える」（六月号）、「広島からチエルノブイリまで」（一〇月号）、「第四原発への建設反対をめぐる署名運動」（十一月号）などがある。特筆すべきは先住民族が抱える「核」問題についての記事もあり、「放射線汚染のない桃源郷——南太平洋群島における反原発運動」（胡叔婉、十一月号）、八七年にはシャマン・ラポガンが執筆した「美麗島！核廃棄物の島——あるヤミ族の涙」（二月号）、「国民党のヤミ族——来る日はさらに悪し」（同）がある。

『台湾と世界』ではテクノロジやエコロジ、科学技術などに関するコラムがあり、科学技術や生態、環境の問題に視座を据えた「核」の関連記事はここによく登場する。科学技術の開発や環境問題の観点から「核」を問題化するのには、『台湾と世界』の特徴の一つとも言えよう。チエルノブイリ原発事故の後、「核」への関心は観点がより多元的になり、例えば従来の台湾電力会社の組織の

問題やエネルギー政策への批判から、原発事故による具体的な被害状況やマーシャル諸島で行われた反核運動、さらに先住民族と「核」との関連もその一例となる。刊行時期は短いものの、『台湾と世界』は「核」を問題化する際の焦点の置き方を台湾社会に提示し、原発運動と台湾先住民族運動を台湾民主化運動の一部として入り組む機会を作った雑誌でもある。ただこの時期の原発への関心の多くは科学的な言説や電力会社の人事や制度といった政治問題であり、また、「広島」や「長崎」に言及する記事もあるが、放射能被害の恐ろしさを語る記号に過ぎず、被爆者の状況や歴史問題への関心が薄いようである。

2 『人間』と樋口健二の「公害の世界」との出会い

報道写真・記録文学を中心とする『人間』は海外の報道写真やカメラマン、報道文学の紹介にも力を注ぐ。『蘭嶼報告 一九八七—二〇〇七』（台湾：人間、二〇〇七年）の著者で写真家である関曉榮や、台湾白色テロの歴史を追求し続けた『幌馬車の歌』（草風館、二〇〇六年。原著一九九一年）の著者でもある藍博洲を始め、『人間』は数多くの報道写真家や報道文学者を育ててきた。この節では日本の公害問題や「原発」問題を生涯追いつけた写真家・樋口健二と『人間』との初期の交流について焦点を当てる。

『人間』は、陳映真が米国の雑誌『Life』と台湾の『生活と環境』（原題：『生活與環境』）に触発されて創刊された雑誌で、四年間の間、全部で四七号を刊行した。『夏潮』の編集にも関わった陳は、一九六一年に淡江文理学院英文科（現・淡江大学）を卒業し、

英語教師や会社社員を勤める傍ら創作活動を始めるが、デビュー作は「麵屋台」（一九五九年）でその後も「私の弟康雄」や「故郷」などを発表し文学活動を続けていく⁶⁾。マルクス主義や左派的思想に関心があり魯迅からの影響が大きかった陳は、白色テロの時代に禁止となる左翼思想の書籍を日本経由して読書会で取り上げた理由で、一九六八年に「転覆叛乱」の容疑で逮捕され一九七五年に特赦で釈放されるが⁷⁾、その後も文学活動を継続し一九八三年にアイオワ大学主催の「国際創作プログラム」にも参加する。獄中生活の経験は陳の社会問題への関心をさらに深めた。戒厳令が解除された翌年の一九八八年に「中国統一連合」を設立し初代主席も務めた陳は、二〇一六年に北京で生涯を閉じるまで台湾独立に反対し中国との統一を主張し続ける。一九七七、七八年に、台湾ナショナル・アイデンティティが芽生えた中で勃発した台湾郷土文学論争の中心人物として論陣を張ったが、台湾社会の抱える社会矛盾への強い関心の背後には、中華人民共和国の共産党への支持と台湾の中国との統一への期待があった。陳のような立場を左翼統一派と称すことがある。

社会意識の強い『人間』は、経済発展による社会構造の変化や公害問題、労働者やハンディキャップ、性的マイノリティなどの問題に注目する。コラム「世界報道写真名作選」は、主に国内外の写真家や報道写真に関する紹介であるが、公害問題や原発関連の記事では日本の事例がよく取り上げられる。例えば第五号掲載の「再見！林投花」は桃園県大潭村で起きた鉦山の精錬に伴う未処理廃水の汚染をめぐる記事で、富山県で発生したイタイイタイ病が言及される。第七号（一九八六年五月）掲載の「水俣悲歌」は写真

家W・ユージン・スミスとその写真集『水俣』（一九七一年）についての紹介記事、同じく第七号掲載の「日本公害の村」は四日市の大気汚染問題をめぐる記事である。

環境や「核」、原発問題をめぐって最も多く注目されるのが日本の写真家・樋口健二（一九三七年）である。樋口が初めて『人間』に登場したのは、第六号の「世界報道写真名作選」にある「訴える！樋口健二の「反公害」の世界」（原題「我要控訴！樋口健二的「反公害」世界」、一九八六年四月）である。樋口は、戦場を記録した報道写真家のロバート・キャパ（Robert Capa、一九一三～一九五四年）や「水俣」の取材で報道写真家としての地位を確立した桑原史成（一九三六年）に触発され、報道写真家を志すようになったという。「訴える！樋口健二の「反公害」の世界」では、報道写真家を志すまでの樋口の経歴は日本社会の時代的な動きと共に紹介される。長野の農家からの出身で日本の経済成長期の時に畑を転売し東京へ赴いた樋口は、日本鋼管川崎製鉄所で臨時労働者として働くが、六〇年安保闘争の抗議デモへの参加、六一年の戦争写真家ロバードの写真展との出会い、さらにフォト・スクール（現東京総合専門写真学校）に入学した六二年当時、東京で大きな反響を呼んだ桑原史成の初個展「水俣病」から受けた刺激などによって、彼の人生に大きな転換期が訪れる。「百姓から臨時雇い労働者になり、（引用者注…長野の実家が寺子屋）国家文化財に指定される屋敷の枠から社会的に軽侮かつ排除されるカメラマンに。（引用者注…報道写真家としての）カメラマンとしての道程は苦難に充ちたものだが、それでも樋口はそれに甘んじて邁進していく。不屈な意志で数十年間も日々同じように働く彼は、自分の良心と寛大な愛で社会の底

辺に在る弱者の代わりに声をあげて、血と涙にまみれたレンズで命を蝕み奪うものや日本の公害問題の根本的な原因でもある社会構造に抗議する。と同時に明晰かつ深刻な訴えも提出している。樋口の決意と根気は、報道写真家を志す人たちのための模範をリアルに呈示している」と、報道写真家・作家の道を目指す『人間』の読者を激励するような語り口で樋口を紹介している。樋口の一七一年間にわたった仕事は「四日市」の海の汚染、原発の公害問題、そして「毒ガス島」と三つに大別され、この記事以降、「四日市毒ガス島」を詳細に取り上げた「日本公害の村・四日市」（原題：日本公害之郷四日市。記事…樋口健二、訳述…劉慶一。第一七号、一九八七年三月）のように、樋口に関する記事を『人間』は次々と掲載するようになる。

「訴える！樋口健二の「反公害」の世界」掲載後、チエルノブイリ原発事故が起きる。後述するように、原発関連に大きく焦点を当てたこの号は台湾社会の読者にとって、「核」をイメージする際の重要な手がかりとなったようだ。そして、「核」問題を通して、樋口自身も積極的に『人間』に関わっていく。一九八七年にニューヨークで開催された「世界核被害者フォーラム」（一九八七年九月二六日～一〇月三日）は、世界の核被害者の実態を明らかにした上、反核運動を国際的に推進することを目的とした。参加者は広島、長崎の原爆被害者も含んだ一六カ国、総計三五〇名に上った。樋口はその会議参加者の一人でもあるが、『人間』の読者投書欄（第二五号、一九八七年二月）にその会議参加の所感を掲載する希望が綴られたハガキが紹介されて、実際に第二七号では「団結しよう 核被害を受けた地球を治療しよう」（原題…團結起來 治癒地

球的核能創傷、撮影・文章・樋口健二、翻訳・荊果、一九八八年一月）という記事が掲載されている。

3 「核」を見る観点・撮るアングルを求めて…チエルノブイリ原発事故の後

透明無色で形もない「核」をいかにイメージし、表象するのか。

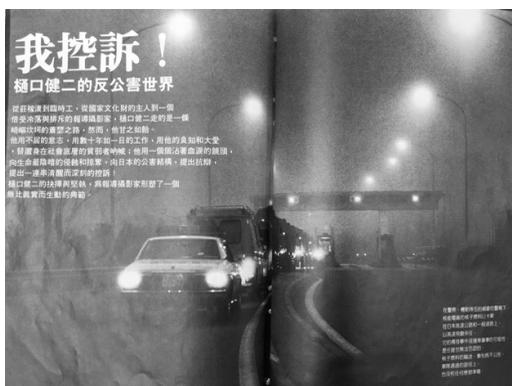
「核」を問題化する際の焦点の置き方や表現の仕方をめぐって、樋口による一連の仕事は『人間』にとつては手本のようなものであった。先に触れた「訴える！樋口健二の「反公害」の世界」で取り上げられた樋口の核関連作品の紹介の仕方についてももう少し詳しく検討してみたい。

誌面の半分あるいは全体を覆う大判の白黒写真を文章と共に掲載するのは、『人間』の特色の一つであるが、この記事も例外ではない。この記事は見開き頁の紙面の全体を占めた写真から始まる。

そこに機動隊を誘導車としながら、燃料棒を積んで一般道路を走るトラックが写っている。説明文は「日本の高速道路や一般道路をハイスピードで走ることに關して、突発事故が絶対起きないとの保障はどこにもない。燃料棒の運搬は事前に公表もされず、利用道路に事故に備えるための措置も何もない」とある。高速道路は「核」が身近な危険性にもなることを象徴している（写真1）。

「荒浜村」で行われた柏崎刈羽原発建設への反対運動を撮影した作品は迫力感のある一枚で、ヘルメットと木棒を手にした年寄りの忿怒の表情が写っており、抗議現場の緊張感が伝わってこよう。

鹿児島県にある川内原発の全貌を構図にした写真についてのその



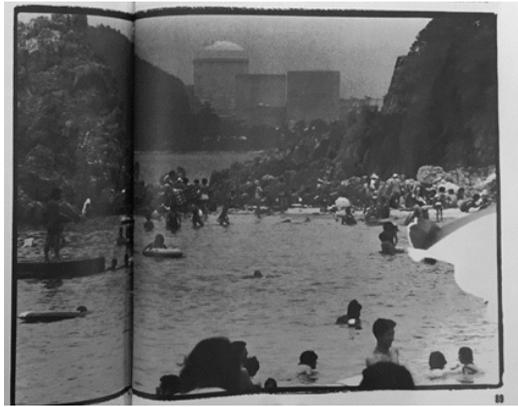
(写真1) 『人間』と樋口健二の作品世界との交流はここから始まる。一般道路を走る光景は身近な危険性にもなることを象徴している。

「人海戦術」も「黒い政権」のもとで行われる、とある。

ほかにもまだ原発建設予定地だった頃の下北半島東通村の海岸や、原発施設の稼働によつて漁業が廃れた日立市久慈浜海岸に停泊する廃船、観光客で賑わう若狭湾美浜海岸の海水浴場などを題材とした写真がある（写真2）。被曝労働者をめぐって、敦賀や福島原発の被曝作業員の被害状況や、「原発被曝裁判」についての詳細、出稼ぎ先の福島原発で被曝した元筑豊炭鉱の坑夫だった作業員などに関する記事も写真と共に掲載されている。

原発関連の樋口の文章や写真は多様な観点で取り上げられるとはいえ、『人間』にとつての最大な関心はやはり資本主義や労働者

キャプションでは、調査資料を改ざんするまで電力会社が強引に沼地地帯で建設したこの二つの原発施設は、自然環境の破壊のみならず、被曝が前提となる中で毎日千人ずつの労働者たちが入れ替わる



(写真2) 若狭湾の「原発銀座」周辺の海水浴場。樋口健二によるこの写真の構図は、後に『人間』でも見られる。

問題にあることは、記事の最後の部分から窺えよう。「石炭エネルギーの産業時代に、汗と涙そして命を絞られ切った下請・孫請けに回された労働者たちは津のように捨てられた。核エネルギーの時代に、彼らは再び下請・孫請け労働者として

て回され原発施設の関連仕事を強いられるが、骨も血も搾取された後、彼らは再び津のように廃棄されるに決まっている。繰り返してきた「暗黒の労働史」をみて、いかなる時代でも身体を唯一の「資本」とする労働者たちは蹂躪される中でしか生きようがないこの世界を思うとただ儼然とする。」(九三頁)。

チエルノブイリ原発事故の後、『人間』は相次いで「我が家の裏庭にある原発」(第八号、一九八六年六月)、「被曝者たちのその後」(第一三号、同年十一月)を特集する。そこに見られる原発表象は、樋口作品による影響が全面に出ている。

特集「我が家の裏庭にある原発」には五つの記事が掲載されており



(写真3) 第三原発の海で遊ぶ子どもたち。

は、明らかに樋口作品による影響が見られる(写真3)。

記事の部分を見ると、『科学技術の独裁』と『恐れる自由』は、アメリカ映画『チャイナ・シンドローム』(一九七九年)に触れながら、科学神話を幻滅させた出来事としてチエルノブイリ原発の事故を見た上で、国境線を越えた核事故の危険性に言及する⁶⁾。「原発は我が家の裏庭にある」では、第一、第二原発周辺の住民や漁師、反核団体への取材が、浜辺と漁村の変化を撮影した大判の写真と共に掲載される。「第三原発への幻想」も原発施設周辺の水揚げ量の減少や原発稼働後の漁村の変化、漁師への取材が中心となるが、核廃棄物を扱う電力会社の従業員のクリーンエネルギーとしての原発を支持した意見や、被曝されたという疑いで、原発施設で一〇年

り、それらすべてが台湾の原発問題に焦点を当てている。原発周辺の住民や漁師への取材、契約制原発労働者の被曝や労働権利に関する問題、海辺や漁村、原発付近の海で遊ぶ人といった写真の撮影角度の取り方などに

近くも働いた契約労働者を突然解雇した電力会社の問題も叙述される。「第四原発」？未知の震動」は、予定された第四原発建設周辺の住民たちが行った反対運動や、台湾電力会社の不当解雇に対する抗議現場を取り上げている。廣瀬隆の作品を訳述した「壊滅の呪い」では、核廃棄物処理所の問題や日本における原発被曝労働者の病状、核廃棄物の再利用による核兵器の開発が触れられている。

特集「被曝者たちのその後」には、第三原発の被曝労働者に関する詳細な記事が二本ある。契約社員をめぐる不当解雇の問題や核廃棄物起重機の操縦者、原発放射線高度汚染エリアで配管・除染作業をした労働者などの被曝問題を扱った二本の記事とも、台湾電力会社に批判の矢が向けられている。同じ号に掲載された「暗闇に葬られた原発被曝労働者たち」（原題：「被埋葬在黑暗中的核電廠被曝工人們」。文章：樋口健二・久米三四郎、撮影：樋口健二、翻訳：周健子）は、樋口健二と久米三四郎による作品の翻訳で、内容は日本の下請けに回された原発労働者をレポートしたものである。登場人物に村井國夫、元筑豊炭鉱労働者の福島原発被曝従業員・握原公司、また農閑期に敦賀原発の中にある高レベル放射線エリアで除染作業中に被曝した森川勇、敦賀原発で働いた梅田龍介（電力会社と和解して訴訟を取り下げた）、斎藤征二（初の原発労働組合を組織した原発被曝労働者）、福島原発で原発炉の除染作業員などがあり、また原発施設における作業中の様子を撮影した写真もある。

「訴える！樋口健二の「反公害」の世界」の掲載直後にチエルノブイリ原発事故が起きたのは偶然であるが、それによって樋口の報道の仕方や写真の取り方は、『人間』に「核」を問題化する際のフ

ォーマットを提供することにもなったと考えられる。特集「我が家の裏庭にある原発」における、海辺や漁業、漁村の風景を通して「核」による環境への影響をイメージする手法や、被曝労働者にクローズアップした特集「被曝者たちのその後」に見られる資本主義に抑圧された労働者として原発被曝労働者を捉える取材の仕方などはその例であろう。台湾電力会社に対する抗議活動を取り上げた第一号で紹介された日本初の「原発被曝裁判」（一九七四年）や被曝者によって組織された原発労働組合の事例も、労働者問題の立場からのものである。

こうも言えるかもしれない。樋口が提示した日本社会の経済成長期におけるエネルギー転換や経済構造の変化でもたらされた環境や労働者問題としての「核」の言説は、『人間』の中で台湾社会の問題としても継承されているのだ。『人間』ではチエルノブイリの原発事故についてはあまり言及されていない代わりに、日本の事例を多く取り上げて紹介する。その理由に関して、記事「暗闇に葬られた原発被曝労働者たち」の紹介文が参考になる。「原発被曝労働者を暗黒な深淵に突き込んだ原因を原発産業、国家装置、マスメディアに求める、この日本からきた辛辣な批判は、台湾社会にどんな反省を投げかけていくか」（一三六頁）とあるように、樋口による一連の仕事は、「核」をいかに問題化しイメージするかを模索する台湾社会に方向性を指し示している。

4 「核」の表象と日本・台湾・中国をめぐる「人間」の歴史認識

『人間』には日本文学や日本の雑誌からの台湾反原発運動への影

響を窺わせる記述が散見される。特に後期になると、そこに「原発」だけではなく「原爆」に関わるものが少数ながら見られるようになる。第三二号にある「反核運動の意義を考える」（原題：「尋找反核運動的意義 當前台灣核電批判運動的反思」。第三号、一九八八年六月）では、「核」の人体への影響は山崎豊子『二つの祖国』を読んで初めて知ったとのエピソードが紹介されている。金山郷で最初の第四原発反対運動が行われる中で、代表者の許廷に原発関連の知識や学問はどこから入手したかと『人間』の記者が質問をした時、許は、日本語の『二つの祖国』を三冊取り出しながら、「最初はここから来た」、「原発に関する知識もほとんど日本の雑誌からなのだ」との話がある。また第三四号には、原民喜「夏の花」の中国語訳が掲載されている（翻訳：林慧。一九八八年八月）。

「原爆」問題が「原発」問題より遅れて登場してくるのはなぜだろうか。『人間』の読者投稿欄では、樋口の戦後日本社会や、戦争問題をめぐる歴史認識に関する投書が見られる⁹⁾。例えば経済成長のもとで犠牲となった労働者の観点から現代日本社会を批判的に見る視線や、瀬戸内海で製造された毒ガス（大久野島）の中国戦場での利用に対する日本の戦争責任に関連する記述がある¹⁰⁾。具体的に樋口が書いた「毒ガスの島にいる棄民」をめぐる翻訳記事を例に挙げると、その紹介文では、「第二次世界大戦中に建設された毒ガス製造工場では、その実情を知らなかった数多くの労働者の中毒事件や犠牲事件が発生した。中国の戦場でも多大な犠牲をもたらした。今日でもその後遺症に苦しまれる人たちがいる。それなのに日本政府はその責任から逃れ続けようとする。戦後復興社会において彼らは忘却された棄民でもある」と、ある。樋口と『人

間』との関係は、『人間』の主宰者であった陳映真の歴史観との「共有」からきた部分もあるだろう。

たとえば陳映真の歴史認識へのこだわりは、第七号（一九八六年五月）に掲載された、「舞踏で「現代の日本社会」に叛乱？」からも垣間見える。これは、一九八六年三月二〇日の公演で舞踏団体・白虎社が来台した際の陳映真による団長・大須賀勇へのインタビュー記事である。取材は「ほかの資料や評論から、大須賀さんは戦後の広島で生まれたことを知ったが、戦後日本についての記憶と体験からどんな影響を受けたか。例えば芸術観や自分の人生や生活など」という質問から始まるが、大須賀勇は広島原爆で胎内被爆者となった個人的な体験と物質不足の戦後生活を強調しながら語り始めるといったように、やりとりの出発から両者の微妙な違いが存在している。記事では六〇年代の日本社会における安保闘争や白虎社のエロティシズムや暴力に満ちた表現手法について紙幅が割かれるのだが、この記事を締めくくりにあたって陳は、「将校の軍服、ふんどし、ベニスを象った現代武器、道具の地球など、それらものは平和主義者にとって今日の世界規模の戦争に対する反対意



(写真4) 白虎社演出中の写真。反戦意識があるものの、大須賀自身は日本の戦争責任に対しては無批判であるとのキャプションもついている。

志を示すメタファーとなる。だが、日中戦争及び第二次世界大戦の時、日本がアジアに施した加害行為に関して、大須賀は批判精神に欠けている」と評価するのである(写真4)。

『人間』は、社会問題や環境問題のほか、日本と台湾、中国をめぐる歴史問題にも強い関心を有するため、以上の発言は決して偶然ではない。日本の劇団に関して言えば、白虎社以外、『人間』は「事実の劇場 劇団 不死鳥(以下、「劇団不死鳥」と略す)と、その劇団を結成した主宰者・石飛仁(本名・樋口仁一)とも密接な交流がある。一九七一年から秋田で起きた中国人強制連行に関する「花岡事件」を調査し始め、一九八四年に花岡事件鹿間建設交渉の代理人も務めた石飛は、『中国人強制連行の記録』(三二書房、一九九七)などの事件の関連著書を多く上梓したノンフィクション作家であり社会運動家でもある。「劇団不死鳥」を紹介し、報告劇『吠えろ！花岡』(原題・怒吼！花岡。一九八六年公演)や天皇の戦争責任と戦後民主主義の欺瞞を問題にした『延命天皇』(一九八八年公演)の台湾公演を実現させたのも『人間』である。石飛仁が創作した戯曲『延命天皇』は『人間』の第三三号に翻訳掲載される(翻訳・陳映真。一九八八年七月公演)が、その紹介文では、「天皇制を清算せぬ戦争責任も反省しないままの日本の戦後民主主義には、重大な危機と災難が孕まれている」とある。

ほかに台湾人元日本兵の戦後賠償問題を扱った記事「道義人権を忘却した日本は人間の恥」(原題・遺忘道義人権の日本、是人間の恥。撮影・河野利彦、文・王墨林。第一八号、一九八七年四月)もある。花岡事件は日本の中国に対する戦争責任問題だとすれば、台湾人元日本兵の戦争賠償問題は台湾に関する問題となる。河野利

彦は八〇年代初期から台湾に通い始め、八五年より写真で台湾人元日本兵や高砂義勇隊を記録し続けていた写真家である。天皇制と戦争問題を批判的に捉える話は『人間』に散在されているが、記事に関して原一男の『ゆきゆきて、神軍』を紹介した「ある反天皇制のドキュメンタリーの誕生」(李墨。第三三号、一九八八年七月)が取り上げられよう¹¹⁾。

見てきたように『人間』は戦争責任や戦後賠償問題、天皇の戦争責任や象徴天皇制の問題について高い関心を持つている。またその眼差しは中国や台湾に止まらず、毒ガスの問題を忘却した日本の戦後民主主義の欺瞞性にも及んでいる。が、その歴史への関心の仕方は台湾社会における「原爆」の言説を封印することにつながるのも否めない。

5 「原爆」言説を封印する回路の形成

一九八八年七月に、『人間』は日中戦争の発端となった盧溝橋事件(七七事変)を記念する「抗日文化活動」を主催し、一連のイベントの中で福田文昭の写真展「日本天皇が残した毒」(原題・日本天皇の遺毒)、報道劇『延命天皇』の上演会、映画『ゆきゆきて、神軍』の鑑賞会などが開催された。他方、陳映真が司会者を務めたフォーラム「日本天皇と戦後責任」(七月一日開催)も行われたが、石飛のほか、学者の許介麟、藤井志津枝等も参加者として出席した。その一連の関連イベントは「石飛仁 旋風」(原題も同じ。文・王墨林、撮影・呉仁麟。第三四号、一九八八年八月)に詳しい。同記事の最後では、フォーラムの中に出た話も紹介されている。「戦

後研究」と「戦後決算」に関する研究の数は台湾では少なすぎるほか、台湾社会は「七七事変」や「南京大虐殺」に関心が無いのと同じように、日本社会も戦後責任に対して無関心であるが、それらの現象はすべて冷戦体制によってもたらされた結果や犠牲などの石飛の意見も言及される。また冷戦下の台湾における日本に対する見方に言及した「軍国日本と経済日本」（原題：軍國日本與經濟日本。一九八八年八月）では「戦後、世界的に展開した冷戦構造において、台湾の経済は日本の垂直的分業構造に付着するような形で発展してきた。日本の資本、技術、文化、精神などに関する商品は台湾では「模範的な日本」として見なされるとそのありようがかなり強い口調で批判的に述べられている。

注目したいのは、原民喜「夏の花」の翻訳紹介は、「七七事変」を記念する時期に掲載されたことである⁽¹²⁾。「夏の花」が掲載された前後の号には、「ある反天皇性のドキュメンタリーの誕生」「石飛仁・旋風」と「軍国日本と経済日本」もあり、つまり抗日に関する文化的イベントの紹介や天皇制批判、花岡事件などに言及した記事に囲繞されるように掲載されたということである。

こうした日本の戦時中の強制連行や戦前から現在に至るまでの日本の軍事的・経済的支配を問題化する論調が支配する誌面において掲載された「夏の花」は、広島原爆の被害を読者に意識化させ、戦後台湾の公的な歴史意識を問うような役割を果たすというよりは、むしろそれは、現在の台湾における「原発」問題——国民党による原発政策とその被害——に接続しうる内容として読まれたと考える方が自然であろう。

また、先に山崎豊子『二つの祖国』の日本語版を読んで「核」の

被害を知ったという人物のエピソードを紹介したが、この作品が最初に台湾で翻訳出版されたのは、一九八五年のことである（中国語名「兩個祖国」、翻訳：陳明台・姚書文、台湾：自立報社）⁽¹³⁾。翻訳の大きな問題として、日系二世のアメリカ人・天羽賢治と原爆病で死んだ恋人井本椰子との交際を描いた部分が大幅カットされている点がまず挙げられるだろう。こうした加工、あるいは変更は、太平洋戦争に巻き込まれ日米の間を彷徨いながら自らのアイデンティティを模索する日系二世の天羽のアイデンティティ問題をより明確化するためであったと推測されるが、当然、そのことによってこの小説における原爆の問題（日米の加害被害の問題）は後景に退いてしまっている。そればかりか日本とアメリカの狭間に置かれる主人公の問題は、台湾の読者にとつて中国なのか台湾なのかという、台湾社会が抱える問題へと置き換えられ読まれる可能性もあるだろう。そもそも台湾で戒厳令が解除された一九八七年の一月に、これまで禁じられていた中国への訪問が解禁され、親族への訪問が可能となった。解禁によつて、国共内戦で国民党の軍隊とともに台湾に渡ってきた人たちが、三〇数年以上も離れた故郷に再び足を踏み入れることができるようになったのだが、そこに至るまでの八〇年代後半、親族訪問を解禁すべきかどうかという議論は盛んに行われた。『二つの祖国』が台湾で翻訳され、読まれた背景にはこうした事情があつたのである。

「核」の人体への影響や関連文学の読み方をめぐって、日本語の『二つの祖国』に触発されて反原発運動に関心を持ち始めたような読者と、戦争責任・植民地問題・天皇制批判の関連言説の延長線上で中国語翻訳の『夏の花』を通して知った読者、八〇年代後

半におけるその両者の存在からは「核」の問題にアクセスする際の台湾における言語事情と『人間』という雑誌メディアの立場性が窺えよう。前述した反原発運動代表者をめぐるエピソードでは、許の日本語リテラシーについて言及されていないが、八〇年代と言えば台湾映画『父さん』（原題…『多桑』、監督…呉念真、一九九四年）の中で描かれたような植民地時代に育った日本語世代がまだ社会的に活躍する時代でもあるため、翻訳を介さずに「核」の言説に直接アクセスできる許のような者は大勢いると想像されよう。実際、『人間』に主宰者の陳による日本語翻訳の記事も掲載されている。

他方で、藍博洲が代表となるように『人間』が育った報道文学の作家や写真家は、戦後五、六〇年代生まれが中心となり「原爆」の問題にアクセスする際、翻訳を経由する場合が多い。八〇年代の台湾で刊行された『廢墟台湾』（宋澤萊、一九八五年）や『天火備忘録』（張大春、一九八六年）と言った「核」の関連文学は、核による人体への影響や被爆者・被曝者が直面せざるを得ない問題より、国家権力や電力会社による陰謀論の形で語られるものが多い。その理由は上に述べたような台湾の言語事情や翻訳事情とも関連があるだろう。ともあれ、八〇年代に刊行された『夏の花』の翻訳紹介は「七七事変」を記念するイベントを紹介した一連の記事の最後に、しかもその号の一番最後を飾った作品として掲載されたことからも窺えるように、「核」の問題に関心を示す『人間』において「原爆」の問題は抗日的歴史観の中で後景に退いていく。『人間』が一貫した社会の暗黒面に対するヒューマニズムの視点から読む読者も存在するのだろう。だが、それは『人間』という雑誌の力学においては、原発における「核」被害の問題へと接続されてしまうことに

よつて、広島、長崎における台湾人もふくめた原爆の被爆者の問題、原爆体験をめぐる歴史認識の問い直しにはいたらない。

以上見てきたように、原発をイメージ化する作業には、『人間』の反国民党イデオロギーと日本の戦争責任問題への追及といった二つの力学が同時に働いている。前者に関しては公害問題や社会問題を利用しながら国民党政府を批判することであり、後者に関しては花岡事件や日中戦争、台湾人元日本兵の賠償問題をめぐる記事が代表となるように中国本土の日本に対する戦争責任の追及や反帝国主義の動きと連動している。特に後者に関して見てきたように、『人間』は「戦後日本」が抱える歴史や社会問題をテーマに創作活動を行う日本側のアーティストと深く交流をしていた。樋口健二は原発以外にも、毒ガスをめぐる戦争問題にも関心を持ち、河野利彦は台湾人元日本兵を八〇年代初期から台湾に通い続けて記録し、写真家・福田文昭は天皇制批判を提示する写真活動を行う。また劇作家の石飛仁は早い段階から花岡事件の史実調査を開始し戦争問題を演劇の形を通して表現する。要するに『人間』は、戦争責任や植民地問題、戦後日本の民主主義などといった「戦後日本」が抱える問題に関心を持つ作家とも交流をしながら自らの歴史認識を形成していく。『人間』と「戦後日本」との接点を「抗日」的史観で語るのには容易だが、その連携にいかなる希望や期待が見出されるかを考える必要もあるだろう。ともあれ八〇年代の台湾で「核」の問題を語るときに、公害問題として「原発」は注目されたが、歴史認識と関わる「原爆」を受容するためにまだまだ時間が必要だったのかもしれない。

- 1 「はだしのゲンをひろめる会」 (<http://hadashingen.jp/>) 二〇一七年一月アクセス)によると「中国国内の出版事情から出版は困難な状態だが、台湾版での翻訳・出版」となったとある。
 - 2 李展平「長崎原爆 台湾医生陳新賜・王文其歴史記」(台湾…晨星 二〇一二年)が初めて台湾人被爆者についてのまとまった書物である。日本では同じ年に、平野伸人編・監修『台湾の被爆者たち』(長崎新聞社、二〇一二年)が刊行されている。
 - 3 「十大建設」は蔣経国が打ち出した大規模なインフラ整備のための経済計画である。七〇年代以降、日本、アメリカ、韓国と相次いで国交を断絶し国連からも脱退し、国際的に孤立された中で推進された計画でもある。
 - 4 原題…『透視核能發展的問題』、林致仁が『新聞週刊』(一九七四年四月一二日)より抜粋翻訳とある。
 - 5 陳映真の詳細については、『戒嚴令下の文学—台湾作家・陳映真文集』(間ふさ子・丸川哲史訳、せりか書房、二〇一六年)を参照されたい。
 - 6 逮捕者三六人が出たこの「民主台湾聯盟事件」は、戦後の台湾文学界において最も多くの人たちが巻き込まれた白色テロである。「民主台湾聯盟」とは一九六六年の中国文化大革命が起きた後、陳映真をはじめとしたマルクス主義や中国研究に関心のある人たちが中心となって結成した読書会をベースとした組織である。
 - 7 記事には敦賀発電所で被曝した岩佐嘉寿幸(一九七一年に被曝)による初の「原発被曝裁判」(一九七四年)や同じ施設にいた日雇い労働者の村居國夫、森井勇、松本勝などが紹介される。福島原発の部
- 分では筑豊の坑夫だった作業員・永田利男が登場してくる。
- 8 一から五までの原題は次の通りである。「科技獨裁」與「恐懼的自由」、「核電就在我家後院」、「核三迷思」、「核四」?一個未知數、「毀面的咒語」。
 - 9 例えば第七号、第一六号、第二五号など。
 - 10 樋口の毒ガスをめぐる作品は、「毒ガスの島にいる棄民」(文…樋口健二、訳…荊果。第二五号、一九八七年一月)で紹介される。引用は目次にある紹介文より。
 - 11 原題…「一部反天皇紀錄片的誕生」。紹介文では「日本人監督・原一男は記録映画を通して天皇制を批判するフィルムを制作した。震えるあなたと私の心をつかむ作品である」とある。記事の中に若槻世都子、黒古一夫、菅孝行による評論も翻訳紹介されている。
 - 12 二〇〇二年に台湾の新海出版社による『夏之花』(訳…陳黎恂)が出版される。
 - 13 日本語テキストの初出は、『週刊新潮』一九八〇年六月二十六日号〜一九八三年八月二日号まで連載。一九八三年に新潮社から三巻本として刊行された。二〇一二年に台湾の皇冠が出版したのも三冊本である。